

今年も雪かきにやってきた。金沢市から富山に向けて国道 304 号線、県境の峠を越えて 1 キロぐらいの高窪という地区に目的の家はある。2011 年から来ているので、今年で 7 回目だが、毎年のように徐々に雪の量が減ってきている。昔は、滋賀と福井の県境の峠、融雪のための散水がビュンビュン飛んできて車の窓ガラスにたたきつけてきた。今庄あたりの豪雪地帯は、国道は除雪がしてあるが、右も左も白い塊だらけだった。ところが、去年ぐらいから、高速道路も一般国道もノーマルタイヤでじゅうぶんに走れそうな穏やかさ、ポカポカ陽気が漂い春の気配が感じられるようになってきた。金沢を過ぎ、目的地に近づいても、ちらちらとしか雪はない。「今年も雪は 少ないかなあ」と話しながら目的の家にやってきた。やはり雪は少ない、去年は雪かきの必要がないかな、というぐらいに少なかったが、今年もより少ない。「シベリヤからの 大寒気団」「日本海側は 例年がない 雪模様」二月の初旬にニュースで騒いでいたが、「たいしたことは ないんだろうね 近年の天気解説は 大げさだから」と高をくくっていたが、案の定である。車が福井に近づくと右手に白山が見えてくる、白山は真っ白にきらり輝いている、「さすがに あれは 神だ」美しさ、神々しさが違う、と白山を眺めながらわがことのように愛でる。道の上にもまわりの田んぼにも大した雪は積もっていない。7 年前の最初の時は、高速道路の上にも雪が残っている、道路の脇には除雪の雪が積み上げられている、目的の家のそばまでは近づけない、除雪のしてある少し広いところに車を止め、車から長靴とスコップを出し、家の玄関までの雪をまず取り除いて戸を開けた。扉の前は 1 メートル以上の雪、家のまわりは屋根に届きそうな雪、えんやこら一日頑張つて、積みあがった上の部分の雪を取り除き、これで春までには融けるでしょう、これで勘弁してもらいましょう、頼りない雪かきで帰った。この地方の雪かきは、屋根から落ちた雪をスコップやダンプという名の雪ソリで川まで捨てにいく作業が雪かきだ。ニュースで見ると大屋根に登って、雪を地面に落とすという勇壮なものではない。瓦にはつりとした釉薬がかかっている、雪がいくらか屋根に積もれば、ドスンと地面にかかって落ちる。雪が降れば軒下に積もる、それをすくって棄てる作業がこの地域の雪かきだ。

すこし前にこの土地の場所、前の国道を写す道路用ライブカメラを発見した。正月から「雪はあるのか 除雪はしているのか」と何度もパソコンで見たが大雪は見られなかった。カメラはどこにあるのか、道にあがって多分あれだろうというモノを見つけた、手を振ればオレが写るかもといたずら心がわいた。“高窪”というバス停がある。この村も過疎になりつつあるらしい、若者が出て行って帰ってこない、老人だらけの村になりつつあるらしい。

ひと口に雪と言っても色々ある、湿った雪、サラサラの雪がある。北に行けば行くほど雪はサラサラになると思うが、北海道やシベリヤの雪はさわったことがない。信州の山のてっぺんの雪が凍って青白くテラリと光っているのは何度か経験した、アイゼン爪も立ちにくいほど硬い雪もあった。ここの雪かきは冬じゅう積もって時間が経ち、雨も降り硬くなっている。オレはいつも倉庫の中にある鉄のスコップを借りて作業する。今年の雪は量が少ないが締めつけられて硬い、スコップを突き足で 10 回ぐらい踏ん張るとすこし崩れる。横にずらして次の場所、また次の場所と同じことを繰り返し、下の方は少し柔らかいので最後の踏ん張りで雪の塊が大きく崩れる。崩れた雪を何度かダンプに乗せ横の川にざぶりと捨てる。またスコップで硬い雪を崩す、それを捨てる、そんな作業を繰り返していくのだ。小型重機でもあれば、1、2 時間もあればすむ作業かも知れないが、人の手で、スコップで、何時間もかかってしまう作業だが、これが面白い、好きな作業だというのだから、オレも変わっているね。

家主の久子さんは年に 7、8 回はここに通うという、山が好きな彼女は、高速道路ばかりではなく山すそを通る昔の道が好きだと、いつも案内してくれる。去年行った岐阜の夜叉が池もこちらから行ける、白山付近のいくつかの山の名前も見える。日野川沿いの道は昔ながらの街並み、街道筋、小さい山がぼつりぼつり。車を止め今庄の街を歩いた。観光地としてあまり力を入れていないのか、よその観光地の街並みに比べ“昔の街並み”というほどには整備されていないが、豪雪地帯の古い町、木造家屋の造りも堂々と凝った建造物、玄関先の樹々も金沢で見かけるような雪用の構え、雪づりや、棒で困って養生がされている。

雪かきの翌日、「山に登ろう 医王山に行こう」と出発した。<いおうぜん>と読む。金沢市から東南東 10 キロぐらい、地域の“おらが山”として人気の山、ハイキングコースも充実している。去年のリベンジ、見上峠にやってきた。途中、どこをどう曲がったのかまったく分からないが、この山は単独にポコリあるのではなく、いくつかの山並みが並んでいるようだ。その中を林道が走り登山道があり、遊びの施設、休憩所がいくつもある。

今年は雪が少ない、出発して高度が上がるにつれ、道の左右に雪が見え始めたが、豪雪地帯というにはちらほらしか積もっていない。今でこそ車で 1 時間もすれば着くが、昔はおそらく人里離れた田舎、雪が降れば山に閉じ込められ、春までは他の地域との交流もままならないようなところだったと思われる、そういう集落をいくつか通ってきた。

登山口に着くと車が 10 台ぐらい止まっている、明るく晴れた今日は、地元の皆さんがたくさん来ている、車のナンバーは地元のものだ。道路の舗装が乾いているところで登山靴に履き替え登山開始。

1 時間ぐらい歩いてきた、林道と登山道が交錯して上に向かっていく。去年は登山道を登ったが、今年は林道を歩いている。まだヒザが完治していないので、ヒザと足首にカイロを貼っている、歩く速度が遅い、いつもの軽快さがない、何人かに抜かされる。去年は吹雪状態で目も開けられないので、もう少し行ったところで撤退した。今年は少し曇ってきたが、温かい穏やかな日差し、雪の白さが目にいたい、サングラスを忘れてきた、鳥目にならないよう暗いところを見るようにつとめて歩いた。この山は観光地として力を入れているのか、林道に登山道、キャンプ場、売店、トイレ、市営のスキー場と盛りだくさんだ。林道にはまだ 1 メートルぐらいの雪が硬く締まっている、これが融けるには 2 カ月ぐらいかかりそう。

雪の上にはたくさんの足跡、ウサギとシカは区別がつく、肉球のある小さいもの、大きいもの、丸いもの、尖ったもの、様々な動物たちが夜中に徘徊している、肉食系も草食系も動き回っている、猛禽類もいるんだろうね。

林道を離れて登山道、雪の中の上り下り、今日の雪は硬いので靴が潜らない、靴だけでじゅうぶん歩ける、ほとんどの人がザックにワカンを結び付けている、ストックをついている。オレは杖代わりにいつもピッケルスタイルだ。尾根道に出た、風がある、寒いのでセーターを着る、と言っても長袖のシャツにセーター姿、春だねえ。尾根道は細いブナ、少し下は胴体ぐらいの太いブナ、ほとんどがブナの木だ。雪が着いている、幹にも枝にも雪が着いている、樹氷となって美しい、暖かい今、雪も角が取れポタリとくび筋に入るとヒヤリとする。

休憩所の扉が開いていた、部屋に入って昼食をとることにした。カップ麺に湯を入れ、チーズ、パン。冬の山にはカップ麺がほっとする、温かくてうまい。この先は雪の急斜面、足のおぼつかない今は中止して帰途につく。お日様が顔を出している、真っ白い雪がまぶしい、頂上に近いこの辺りは雪の量が多い、林道に積もった雪も深く、ちょろり顔を出すガードレールの先が下に見える。福光の街が、富山の街が見える。日本海もかすかに見えそうだ。道路の反射ミラーが目の高さ、新品なのか鏡のようだ。オレはどこに行ってもミラーの写真撮る、ミラーに写った自分を撮る、カメラを胸に抱かえてシャッターを押すので、なかなかうまくは写せないが、帰って見るのが楽しみだ。

下ってきた、タラの群生地、20、30 本はあるかな、「みんな 全部 採ったら あかんよ」

足の方はまだまだ歩けそうだが、雪の山道で足がぼそりと潜るとヒザが痛いのでかばっている、下りはかかとを使ってぐいぐい歩けない、横向きに下っている、林道歩きも以前のように大股でぐいぐい歩けない。夕方のように薄暗くなってきたが時間はまだ 3 時過ぎ、少し寒くジャンパーをはおり、手袋を出した。靴は雪で中まで濡れてきた、手袋も濡れているが、オーバー手袋はいらない暖かさ、登山口に帰ってきた。向こうの山、木々の枝が空に向かっていく、冬の間は尖ったように空に突き刺さっていたが、こころもち先が膨らみ、こころもち赤く色づいて見える、樹々も春の用意をしているのだろう、雪国の春も近いのかもしれない。

山から帰り 1 時間ほど雪かきをした。「さあ買い物 さあ風呂」とでかけた。「いつもの風呂が休みなんで ちょっとマイナーな風呂 だけど 地元では人気の風呂」と坂を下った。「ここは知っている 以前 来たことがある」元来、風呂が好きではなかったが、ヒザイタ以来温めると気持ちがいいので、最近は「風呂も快適だ」というようになった。身体を洗って湯船に浸かろうと、なんと深い、「いてて」ヒザが曲がってしまった。これがよかった、荒治療になった、へそぐらいまである湯船でヒザが快適、まさに怪我の功名なり。

281016-40:「わたしはわたし」シリーズ。このシリーズの絵を描き続けています。人が手を伸ばしあっている、話している、笑っている、いさかっている、どれだろうね。2枚をくっつけるこの技法、真ん中の線が緩衝材になって、次元の違ったものがあるのではないのかなと期待しています。

091016-25: この絵は、だらだら時間がかかってしまった。一皮むけば違う層が、その下にも、その下にも、というように、陽の目を見なかった残骸が見てとれるはずです。その残骸たちは、「どうだ うまくいった」というにはもの足りない、「まだ できあがっていないよ」というヤツらでした。

070117-25: このシリーズのイメージは、「ひとが歩く」というところから出発しています。画面右を向いて大きく足を開き、大きく手を振り、紐でしばられた靴が地面をけっています。そのイメージがどんどん昇華してこのような抽象画面になりました。

140217-10:「わたしはわたし」わたしの顔、きみの顔、あなたの顔、いろいろな表情も想いもあるだろうけれど、そんなことはほっておいて、形、形態を追っています。これに、手が追加、足が追加、それに何が追加かな、というように増殖する絵もあります。オレの絵がますます抽象化の様子が進んでいます。

200217-06: この絵は麻布に描いています。普通、油絵のキャンバスは麻布ですが、オレは普段、綿布に描いています。先日の2月、雪の降ったあと滋賀県高島市の織布会社に布を買いに行きました。「ノーマルタイヤではだめですよ」と社長から聞き車を借りて布を買ってきました。綿・化繊混・麻を買ってきました。

050117-30: この絵はふわりと上手く仕上がった。最後の白色を入れるまでながらく壁にかかっていた。簡単だったでしょう、と、おっしゃいますが、こういう色の入れ方は、勇気がいります、覚悟がいります、失敗したら終わりですから。うまく行って、ほっとしております。

301116-10: 10年ぐらい前ですかねえ、国道169号線を南へ、奈良と和歌山の境、下北山村のダムを見上げて描きました。去年その絵を見つけ、はさみで切り新しい画面に貼り付けた。「自分の体を 分解して 置いた」という感じ、難なく出来上がったが、違和感も残る。

081016-20:「わたしはわたし」シリーズ。この形は、オレ自身が造った象形文字だといっています。古代に世界のあちこちで、絵文字、象形文字があるようです。古代の洞窟に描かれた絵、石に掘られた絵やら文字やらを見ていると、描いている奴らの息吹を感じます。

110516-10:「セロひくひと」3色の絵の具で色面を塗った。オレンジ・ブルー・ブラックの3色で描いた、できあがった。おしゃれすぎるな、きれいすぎるな、でもうまくいった、と、ないまぜな気持ち。

080117-30: 昔の油絵絵描き、いろいろな禁忌を教えてくださいました。その一つ、白色を混ぜた絵の具を多用すると、絵が白っぽくなる、ということがありました。いつもは白色とほかの絵の具は混ぜません。この絵、画面右半分の明るい緑色には白色が混ざっています。この色を使ったおかげで、絵が生き返りました。

130591-W: 自転車の絵もたくさん描いた。時には自転車がバイクになったりもする。オレ自身は俗にいう“ママチャリ”と呼ばれる普通の自転車で、あちこちを動き回っている。「え そんなところまで 自転車で」と驚かれるぐらい遠出している。好きな場所は淀川の河川敷だ。

250801-W: 2001年、「ふらふらペインティングの旅-北海道」ということで1ヶ月以上北海道にいた。その時に描いた水彩画、富良野付近の絵だ。去年「チト 柄が 重い」と見ていて考えたあげく、画面をナイフで切り穴を開けてみた。おお再生した、生き返った、と悦に入っている。

100117-20:「わたしはわたし」シリーズ。「絵具は顔料だ」なんて偉そうなことを言っていました。。「顔料とは水や油に 不溶のもの 溶けるものは 染料」これを聞き、啞然としながらも納得、そうだったのか。油絵の具は、石を砕き、樹脂に混ぜ塗る。樹脂が乾いて絵の具が着床する。現在は化学的に顔料を作っているらしい。

111016-03: 絵を描き終わると、日付とサインを入れます。日付は日・月・年の順番に入れます。二十歳代に見た、“ホルスト・ヤンセン”ドイツ:1929~1995の展覧会で、絵は好きな絵でしたが、日付の書き方を見て、これを真似しようとそれ以後続けています。サインはTAKAと書いています。

去年の秋、福井県の山を登っている時、ヒザを痛めました。簡単なところを下りながら、「あれれ やったかな」という程度でしたが、翌日の山の上り下りでどんどん悪くなったようで、それ以来2,3カ月、普段通りに歩けず、「暖かくなるまで 治らないかも」という日々を過ごしました。皆様の話の中で、頭痛の話、筋肉痛の話、そのほか色々な部位の痛みが出てくるが、痛みが本人に襲ってこない限り、その本当の痛み、回復しないのではないのかという不安、何日も続く精神的ダメージ、そんなこながわからないものだ。痛みは、生きていく活力、気力をそぐものでものねえ。40歳ぐらいの頃でしたか、元気な盛り、真冬に友人と誘い合い、自転車で仲間のところに遊びに行った。耳が冷たく痛い、マフラーをして来ればよかったぐらいに思っていました。あくる日どうも頭が重いと感じ、その翌日ぐらいから春が来るまで、午前中の2,3時間ぐらい強烈な頭痛に悩まされました。何か所かの医療機関にかかったが、「?」「たいしたことはない ただの頭痛」と鎮痛剤を渡されただけでした。死に至る病ではないということだったのでしょうが、オレ自身、思いつきり痛い思いをしました。最後に見た耳鼻咽喉科で「三叉神経が 冷えて 傷んだ 暖かくなれば 治る」と言われた通り、5月のGW頃には無事治ったように記憶しています。

絵が描ける、次々と描ける、どんどん描ける。これはありがたい、楽しい、われながら素晴らしい限り、と自賛。相変わらず駄作がたくさん、在庫が増える、という状態ながら、あれやこれや描きまくっております。先日もキャンパス用の布をたくさん仕入れてきました。たくさんあるぞと思っていた布が少なくなり、少し前から布屋さんを探していました。思い切って滋賀県の織布屋さんに手紙を書きました。「使えるかどうか わからんが 見に来てください 道路は ノーマルタイヤでは だめですよ」スタッドレスタイヤの車を借り高島市まで行き、綿布・麻・化繊混の3種類を手に入れました。これでキャンパス用の布はある、材料はたくさんある、絵の具はある、と調子に乗って描いています。「オカムラ よくまあ やっていけるなあ やってるなあ・・・」と友人たちから揶揄され、彼らをあきれさせておりますが、「これが まあ なんとでもなるもの」と笑っております。

去年、奥に積んである水彩画の整理をしようと思いたち、ビニール袋の束を出してきました。「うまくいった絵も うまくいかなかった絵もある」「うまくいかなかった絵を 選び出し 棄てるなり 直すなり しよう」と始めた。十日もあれば、一カ月もあれば、と気軽に始めたが、出てくるは出てくるは、千枚以上の水彩画、ほとんど毎日取り組んだ修正と撮影、夏の終わりころまでかかってしまった。水張りをせずに水彩絵の具を載せると、画用紙が波打つ、ボコボコになる。最終的にはボコボコになるのもやむなし、絵の具を入れた。紙を切って絵に貼り付けた、絵に穴を開け、裏から色紙をあてがった、というような裏技を使って、水彩画の修正が終わった。久しぶりに若いころの絵に接し、オレ自身も若返り、楽しい時間を過ごした。

絵を描くとき、オレの絵のスタイルとは、まずは一筆、次、そして次、一筆が5,6回でできあがるやつがたまにあります。しかもこれらの作品はなかなかいい、思い切りがいい、単純に素直にしかも力強く仕上がっている。ところがどっこい、こんなことはまれでこんなことがいつもあるわけではない。なかなかスイスイとはできあがってくれない、この5,6回を逃がしてしまうと、「ドツボに 落ちる」と表現するが、どうにもならない、次にまた次にと描きこんでいくほどに絵が汚く濁ってくる。ここであきらめ、その絵を捨て、次の新しい絵にかかれればいいのかもしれないが、それはしない、しつこく追いかけます。しつこく追いかけるのが、良い癖なのか悪い癖なのかこれはわからないが、若いころ「描きこんで 描きこんで」と人からも言われ、自身もそうしてきたので、そのなごりが半世紀も経った今でも身体の半分に残っているのか、しつこく追いかけますねえ。白い画面に5,6回筆をおろした時点で、「この絵は ここで終われない」と烙印を押した絵たちとは、押したり引いたり、しばらく寝かしたり、時間をかけます。白い画面に5,6回筆をおろした時点で、「できた 仕上がった うまくいった」というような清々しいおもいが一年で度々あるわけではなく、ほとんどの絵とは、描いては眺め、描いてはためいき、時間、時間、と絵描きごっこが続きます。考えてみればこの「絵描きごっこが 我が人生の楽しみだった」ということですかねえ。

安威川の河川敷に来ている。空を見上げると、おひさんが照っているが、空の半分には入道雲まではいかないが白とグレーのによきによき雲が、あとの半分は真っ青、「きれいな空だねえ」といえるような青空が半分。風がきつい、自転車で走ってきたが、風に押されて止まりそうになった。日本海側では雪が舞っているとか。

安威川の最近、河川改修なのか、オレがいつも往来する 10 キロ前後の川の流れの中に重機が入り、土を掘り返し、水の流れを変え、なんだかすっかりおもむきが変わってしまった。安威川に来るようになって 20 年以上になるが、今まで、小規模に部分的に重機が入って川の流れを変えるような工事は見たが、今回の改修工事は規模が大きく、徹底的に造りかえている、緑が全くなかった。昨今の重機、1.2 カ月の間に簡単にこの大改修を終えてしまったのには驚きだ。今は整地された草がない土だけの中の島と、水量が少ない流れだけだ。これだけ掘り返したこれから、夏になると草のジャングルが戻ってくるかどうか、自然の持っている再生力が楽しみだ。

しかし流れている水はきれいねえ、これは清流といえるだろう。だが 30 年 40 年前の安威川を知っているオレとしては、底に積もったヘドロ、化学物質、生活用品が見えてくるようで、とても清らかだとはいってられない。大阪市内の道頓堀川、それこそ、ヘドロの象徴、悪臭が漂うため池だった。多分あそこの水も徐々にきれいになってきているのだろうが、底ざらえでもしない限り、ボートだの、泳ぐだの、したくないねえ。

先日読んだ歴史の本の中に、大阪の古代の水の流れ、人工的に作られた川や堤防があるという。中百舌鳥古墳群を造った労働力や技術、街造りでもいかされたはずだと書いてあった。大阪市内の川の流れ、いつごろだれが掘っていたのか、どんな奴が生活していたのか、そんなことを考えるとぞくぞくしてくるねえ。

秋に膝を痛めて以来、治らない、どうすればいい、何かいい方法は、ということばかり考えていた。正月に、「昔、通っていた スポーツジムが いいかも」と思いたちネットで調べた。正月 4 日のみ、申し込みば格安料金で入会できるというのを見つけ、早速でむいた。昔はジムに毎日のように通っていた、ベルトの上で走り、床で体操し、ダンベルもあげていた。20 年経って、ジムの中に入ると、ベルトでは走れない、昔は 10 や 12 キロという速度で 30 分や 1 時間走っていたが、6 キロという数字でも歩きづらい。床でのストレッチもなんだかしたくない。ダンベルも重い。10 回ぐらいは毎日通った、サウナの中は快適だ、熱い風呂は気持ちがいい、それがだんだん野外がいい、やはり今までのように安威川で走る、歩く、体操する、この感激はやめられないと、ジムに通う回数が減り、最近では以前のように毎日安威川に来ている。2 月ごろまでひざいたで走れなかった、自転車で土や草の上を走った、以前と同じようにベンチでストレッチ体操をしていた。安威川のあと、入浴のためジムに行ったが、もうジムはやめることにした。

展覧会直前、あといくつか寝ると初日がやってくる、展覧会が始まる。たっぷり時間はある、ゆっくりやろう、大きな絵はできあがっている、先週ぐらいからできあがっている小さい絵を選び、額に入れる作業を始めた。その他の作業をメモにした、持っていかなければいけないもの、用意しなければいけないもの、10 個ぐらいの項目を書いた。すべての用意はオレひとりですなければならぬ、だれも手伝ってはくれない。ひとに手伝わせないのが悪い性格なのかもしれない、自分ひとりですべてを把握し、すべてを片づける、これはよくない。まわりの人たちが、「やつのためなら」と身銭を切り、寸暇を惜しんで手伝ってくれる人を持っているやつがいる、オレもそうならなくては。

小さい絵の額装をしながら気になった話。3・6・10 号程度の大きさの絵を積んである中から選び出した、最近描いた絵の数々。次いで昨年や一昨年に展覧会が終わったそのまま奥に収納したままのやつらを出してきた。額から外し、木枠から外し、新しい絵を木枠に張り、額に入れる作業を始めた。サインの横に 15 年 16 年と書いた絵がたくさん出てくる。「こやつらいいじゃないか 今年のよりいいかも 今年のはまずいか」なんて弱気の妄想に駆られる。オレにとって、「今が大事 今が好き」といつも思っている、錯綜した傲慢だね。「昨日のものの方がいいとは いやだねえ 納得できないねえ 面白くないねえ」こんなことってないですか、「今のものも 去年のものも 10 年前のものも 20 年前のものも お前の作品なんだろう」と、冷静に諭されるのだが。もの造りの人にとって、「今がいいに 決まっているじゃないか」というセリフはオレだけのことなのかな。もっとも他人の仕事になると、「オレは 君の 00 年ころの仕事が 好きだね」とはっきり言っている、おかしい話だ。

シеста倶楽部の展覧会、もう7回8回になるのだろうか、みなさんゆったりコーヒーを飲み、話を楽しんで帰られる。3:11の東北大震災の話になると、「ちょうど あの日に ここに来た」「何も知らずに パーティやっていた」という話が何人かから聞かれる。

展覧会会期中は電車に乗って画廊に通う。電車に乗る生活、「ちょっと よそいきを 着て」というようなことが少なくなった今、この1週間は、人に会う、電車に乗る、都会にいる、という違った環境に身を置き、楽しくもあり苦しくもあり、という生活だが、思えば若いころはこれが普通だった。

「シеста倶楽部」という名称、画廊に居られる向井先生（オレより6歳年長）が以前、老松町でも同名の画廊をされておられたとか。先生、オレがいつも行く雪かきの場所から東北に少し行った高岡のお生まれ、金沢美大のデザイン科を出られ、建築デザインの世界で名を挙げられていた。水彩画もじょうずだ、海や山や木やらを描いたものは「オレには とてもまねができない」絵を描かれ、水彩教室でたくさんの方を教えている。

画廊、オーナー夫人の幸子さんが、「向井先生に頼んで 金に糸目をつけず・・・」というだけあって、隅々まで目が行き届き、材料もほんまもの思考、20年経った今少々傷んで傷や汚れが目立つが、まだまだ立派なものだ。

「毎回 少しずつ 違うね 絵が変わっていったるね」「ネットで 見る写真では 我が家にあるものと 同じ種類の絵だと思っていたが 違うね」と友人の話。この展覧会、見せたいのと売りたい、多少雑多になってしまうところはある。次回、見せたいと思う展覧会は、「作品だ と胸を張れるものを」とはいえあまり力を入れすぎると、気持ちばかりが先行して反対に薄っぺらいものになってしまう。そのあたりのことを考え無心に、お気に入りをお金を数少なく並べるようにしてみようと思っている。

驚いたのは、「この人形 欲しい 買いたい これにする これがいい」とおっしゃる、襤褸君のことだ。「こんなもの 売りものじゃないよ」と笑って答えたがあくまで買う、5000円で買うという。古い友人、30歳ころに知り合った絵描きだ。わが襤褸君、「わちきが 好まれ もらわれていくとは」と彼も苦笑しているやも。すぐに持ち帰り、土台にしっかりした板をあてがい、全体補修をする予定。細い木や、紙や、布で、作っているのが構造的にも弱い、オレとしては、ごみに近いものだが、5000円はありがたい話である。

「タブレットをもったら」「パンフレットがないの」最近は今までネットのことを知らなかった方々から、オレの絵が見られるもの、例えばタブレット、例えばパンフレット、と聞かれる。とっさに、「ないねえ・・・」と答えたが、オレには立派なホームページがあるじゃないですか、と思い出した。

「額作りを習っている」思わぬ話に身を乗り出した。仲間の方々と楽しく絵を描いているといわれる同年配の女性が、公募展に出品のための額作りを習っているという。教えている方は元建具職人の80歳の方らしい。趣味で家具を作っている方、それらの方々2.3人で、2.3人の女性に木工を教えているらしい。オレもいくつか手造り額を造った、ドシロウトの作業、45度に木を切る、貼り合わせる、裏ぶたを作る、できあがって「不細工だねえ」と感嘆するがこんなものしかできない。45度に木を切るにはどうしたらいいのか、材料の木はどれを選べばいいのか、構造的にどう組み立てたら強く長持ちするのか、そういう基本的な“イロハ”を習いたいと思っていたが、思わぬ“なはし”が降ってきた。BESTな方法、道具、材料、それらの“イロハ”を習えるかもしれないが、80歳の高齢、これがネックらしい。

「展覧会の DM を 400枚 同封して いただけますか」とお願いできる仲間の会がありそれが功を奏して、普段付き合いのない二人が画廊にやってきた。ひとり顔も見えない人ながら同じ釜の飯の仲間、「おお よく来てくれた」と話し込み、彼もながらく座っていた。もうひとは振り向くと後ろに立っていた。「え 入院してたのでは大丈夫か・・・」「話せば長い 動脈乖離が見つかり 結石が見つかり 次々あちこちがおかしくなり・・・」かつての紅顔の美少年も老翁になりけり。

恒例の1000円パーティを毎回最終日の前日にやっている。今年は山仲間の方々が食料買い出しに行ってくれた。机を出し、料理を並べ、冷えたビール、ワイン、乾杯のあとはワイワイガヤガヤと時間が過ぎていく。「岡村さんのパーティは 老人会みたい」という40歳代の彼女も3人連れでやってきてくれたが、彼女の言うようにオレの友人仲間の年齢はオレと同世代、まさに老人会だ。